子どもの発達と絵本*
——ぬいぐるみから絵本の世界へ——

Child Development and the World of Picture Book
—From the Stage of Stuffed Animal to that of Picture Book—

井原成男**
Nario Ihara

はじめに：移行対象とは？

今日はイメージがもつ力，イメージが子どもの発達の中で果たす役割についてお話してみたいと思います。

今日のお話の中で使うキイ・ワードとして移行対象というコトバがあります。耳慣れないコトバだと思います。これはイギリスのウィニコットという人がいい始めたコトバです[1]。図1をみてください。これはチャーリー・ブラウンやスヌーピーが登場する，御存知のピーナッツ・ブックにでてくるライナスという少年です[2]。彼はいつも指しゃぶりしながら毛布をはなしません。それでモーレッ姉さんルーシーに「現実をみなさい！」と叱られています。この毛布が移行対象なのです。移行対象には，毛布，ぬいぐるみなど肌ざわりのよいものがえらばれます。これは，それをもつことで子どもが安心できるものだということ，それが大切です[3]。

図1　ライナスの移行対象[2]

移行対象になりやすいものとしてぬいぐるみをあげることができます。ぬいぐるみの写真をいくつかとってきました。図2をみてください。これはぬいぐるみ屋さんの前でうつしてきたものです。買おうと思ったのですが5千円もするのでやめました。写真だけとってきました。ぬいぐるみというのは結構高いんです。図3はコアラのぬいぐるみです。コアラはずい分人気のある動物ですが，どうしてあんなに人気があるんでしょうか？　それはあの母親にしがみついている姿が何ともいえずかわいい，保護本能をひきだしてしまうわけです。実際のコアラはそんなに母性的ではないそうですので[4]，これはコアラに対して我々がもってい

図2　カンガルーのぬいぐるみ

---

* 本稿は1984年8月19日に，板橋区立美術館において講演したものを文章化したものである。この講演は1984年イタリア・ボローニャ国際絵本原画展を記念しておこなわれた。講演の機会を与えて下さった館長の大澤健一先生と館員の尾崎真人氏に感謝したい。尾崎氏は筆者の早大少年文学会時代の親友でもある。筆者がこの講演をしてとくに嬉しかったのは，「最前列でぬいぐるみを手にした女の子がこの講演をきいていたが，講演をきいたあと，皆んなの少女に対するまなざしが，とても暖かいものに変化していた」という金子玲子さん（専修大学学生相談室）の報告であった。そのような変化こそ筆者の期待したものであった。文中の症例の共同治療者は木村涼子氏（港区立のぞみの家）である。テディ・ベアについて示唆を与えて下さった渡辺由美氏（日本医科大学附属図書館）にもお礼を申し上げたい。なお，本講演の要旨は，季刊　絵本　No. 10　すばる書房　1985年3月刊に掲載されている。

** 東京慈恵会医科大学小児科〔〒105 港区西新橋3-25-8〕
（長野大学）

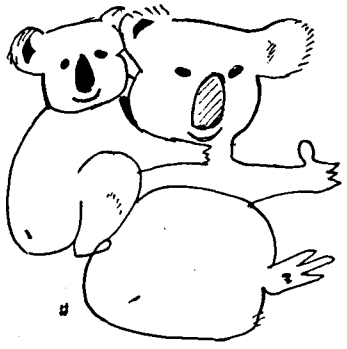


図3　コアラのぬいぐるみ

図4　ぬいぐるみの犬の親子（はなれている状態）

るイメージだと考えていいと思います[注1]。きわめつけは次のぬいぐるみです。図4をみて下さい。こういう風に犬の親子はヒモで結ばれています。このぬいぐるみはオルゴールになっていまして，おいておくと，音楽をならしながら最後はだんだん近づいて，ピッタリとくっついてしまうわけです。図5のように母子ピッタリとくっついてもう離れないという雰囲気です。鼻がつぶれるくらいにくっついているのです。

このようなぬいぐるみたちをみていますと，我々にとってぬいぐるみとは一体何なのかが分かるような気がしてきます。私はぬいぐるみは母親の代理物であり，身代りなのだと思います。ここではそう考えてみたいと思います。

私が関係しています施設に，いつもタマ子ちゃん人形という母親のお手製の人形をもってくる子がいました。この子は以前，母親と一緒に登園し，母親と一緒に，一日をすごしていました。しかし，年齢がきて，母子分離することになりました。このときからこの子はタマ子ちゃん人形を持ってくるようになったのでした。この子にとってタマ子ちゃん人形は母親の身代りであるとみてまちがいないでしょう。また，ある子は4歳になり，幼稚園にいきましたが，なかなか母親と離れません。

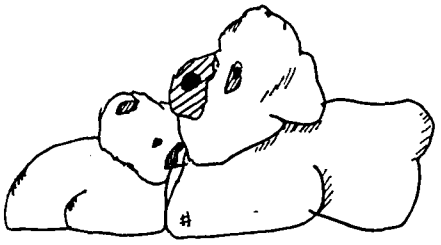


図5　ぬいぐるみの犬の親子（くっついている状態）

そこで母親は自分のハンカチをもたせました。この子はこのハンカチを握りしめて耐えました。このハンカチも母親の身代りであると考えてよいでしょう。

次にこの移行対象がさまざまな現れ方をした3つの症例（ケース）を紹介したいと思います。

ケース紹介

我々はどんな風に母親から離れ自立していくのでしょうか？　我々が母親との分離不安を克服し，自立していくこと，これは何にもまして大切なことです。初期の母子関係が十分に安定し，かつ相方の思いが表現されて，子どもの方に安定した母親イメージができてこそ母親からの分離が可能になっていくのです。先頃話題になりました「北キツネ物語」に子別れの儀式がでてきます。母キツネは種族を守る本能として，自分のテリトリー（なわばり）から，もう一人前になった子どもを追いだします。子どもの方は最初，嫌がっていますが，やがて諦めて去っていきます。そして一人前の成体になっていくのです。このプロセスは感動的ですが，それはおそらく本能的なものです。ですから，子別れをしないでいつまでも一緒にいる「北

注1

ここで母性を表現するイメージとして，カンガルーとコアラが選ばれている。いずれもオーストラリア産の動物であるというのは偶然であろうか？　この2つがもっている特性として①母性をイメージさせるということの他に，②保護しなければ滅びゆく動物であること，③ビンゴーの登場によって絶滅しかけたように，旧大陸の動物にくらべると，大人しい（落ちこぼれである）ということがあげられると思う。このあたりの事情については「ぬいぐるみたちの性格」と題して，別に論じたい。

キツネ」などいないわけです。ところが人間はイメージというやっかいなものを持っています。これは両刃の剣です。やっかいでもあれば，力にもなるのです。我々はこのイメージの中で，子別れ(＝母子分離)をしていかなければならない。それがなかなか大変なところなんです。うまくいかないと，うらみや不安が残ってしまうのです。

次にさまざまな理由から，母子分離に不安をきたしたケースについてとりあげます。この子たちは母なるものの安定したイメージができていない子どもたちです。

ケース1：移行対象をとりあげることで次々と執着するものが移っていった例[5)]

このケースはオナニーをするということで，相談にみえた5歳の女の子です。幼少女から，ききわけのよい，大変大人しい子であったということです。この子は生まれて3ヶ月は母乳で育ったのですが，母親は血栓ができて入院しなければならなくなりました。このため，入院中祖母にあずけたわけです。入院中，母親は乳が張るたびに母乳をあげられずに済まないと思ったということです。一方，子どもの方は哺乳瓶を嫌がってなかなかのまなかったそうです。その結果，指しゃぶりや，毛布，ガーゼなどをしゃぶって寝るくせがつき，すべてボロボロになってしまったそうです。このうち指しゃぶりについては，爪にマニキュアをぬり，毒だといって強制的に止めさせました。保健所で歯ならびが悪くなるといわれただけでなく，このような行為は赤ちゃんぽい行為だと思ったということです。

ところで，この母親に会う前，私はどんなお母さんか予想を立ててみました。せっかちなお母さんが来るだろうなという予想が立ちました。果して当日会ってみると，このお母さんといると，まるで明日にでも世の中どうかなってしまうんじゃないか？　こちらにもそんな心配が浮んできてしまう，そういうお母さんでした。とても心配症の人なんですね。

お母さんは娘に，毛布，ガーゼも止めようね！ダメになるからというようになります。そしたら，大変きき分けの良い子で，止めてくれたんだそうです。

ところがさらに，4歳からマスターベーション(＝オナニー)が始まってしまったのでした。母親は，今度はオフトンがダメになるからといって止めさせました。(この子はフトンを股の間にはさんで，まるで人形でも抱くみたいにして，オナニーをしていたんです。) そしたら，今度はかくれて，するようになりました。母親が部屋にいくと，さっと止めるのですが，顔が真赤に上気していることからオナニーをしているのはまちがいないというのです。

このような経過をみてきますと，この子は，ずっと「とりあげられる体験」ばかりしてきているということが分かります。与えられ，満たされる体験ではなく，とりあげられる体験ばかりしてきたのです。

これは母親自身についても同じでした。母親自身もおばあちゃん子で，本当に欲しかった母親からの愛情を与えられずに育った方のようでした。しかし，祖母からは溺愛され，自立が遅れたのだそうです。自分が甘えん坊であるということに，やっと高校生になってから気づいたこの母親はそれ以後，必死でガンバり，キャリア・ウーマンとして成長してきました。そのため，結婚もずい分遅れたのです。このために，母親は自分の娘にだけは早く自立して欲しいと願ったのでした。このような母親にとって，指しゃぶり，チビチビなどの「赤ちゃんぽい態度」はなんとかして早く卒業させなければならないものとして映ったのでした。子どもに対して済まない（だから早く自立させてあげなければ！）という母親の願いは，このようにして裏目にでてしまったというわけです。

このことから分ることは，移行対象は決してとりあげてはいけないということです。これを教訓にしたいと思います。我々がこんなケースに出会ったとき，しなければならないのは，この子には何が満たされていないのかを知ることなのです。この子にとって欠けているのは，母なるものの安定したイメージなのです。

移行対象とは何か？　それは①いつでもあるもの，そして②いつでも自分を裏切らない（＝自由にできる）もののシンボルなのです。

ケース2：移行対象がきわめて遅れて出現した例[6]

このケースは登校拒否の女の子です。小3～小4にかけて私のところに相談に来ました。図6をみてください。この子の家族構成です。この子のおじいちゃんは女の人ができて，一緒に蒸発してしまいました。このおじいちゃんは，おばあちゃんに嫌気がさして家出したわけです。とても怖いおばあちゃんで，おじいちゃんを追いだしてしまうぐらいの人なんですね。ところで，この点線で囲った丸の中をみて下さい。これは，この子のお母さんの兄弟構成です。11人兄弟の一番下なんですね。お父さんが57歳，お母さんが47歳のときの子なんです。一番上と下が25歳も離れています。このお母さんのすぐ上はお姉さんです。実はこの子が私の勤めています大学病院に精密検査のために入院したとき，私はこのお姉さんの方が母親かと思っていました。一緒にいる人で泣いてばかりいる人がいるなと思った，実はこの人の方がお母さんでした。そんな頼りないお母さんなんですね。こんな頼りない人が，例の怖いおばあちゃんの所にお嫁に行ったわけです。平穏にいくわけがありません。実際，このお母さんは，この子がお腹にいるときに，あまりの辛さに裸足で家を飛び出したことがあるといいます。この子が生まれてからも家を出ようと決心したことが再三あったそうです。こんな状況でよい母子関係が育くまれるわけがありません。お母さんにとっては娘を連れて公園に遊びに出ている時だけがホッとした息ぬきの場であったといいます。このお母さんに公園で一緒に何して遊びましたか？ ときいてみても何も憶えてないんですね。それどころではなかった。やっと息ぬきできる場なんですから。ただ空の青さだけを憶えているといわれました。

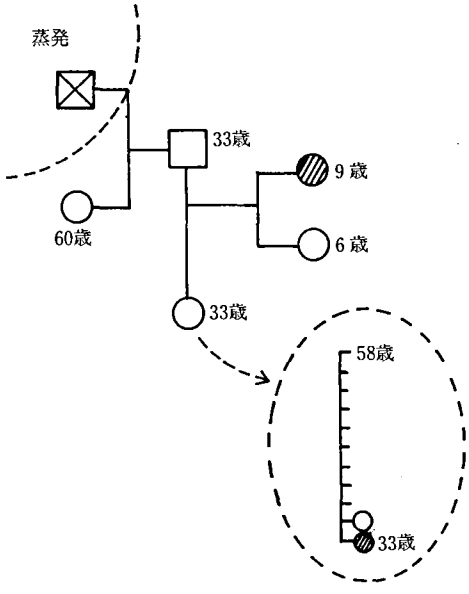


図6　症例2の家族構成

このお母さんが，この子の3歳までの様子をよく憶えていないのにはもう一つ理由がありました。

この家のおばあさんは同じ敷地内の自分の部屋にこの子をいつも呼んでいました。かわいい孫を嫁にはまかせられないというわけです。

この子が登校しなくなったのには2つの理由がありました。それは①給食が食べられずに，班内で他の子から批判されたこと，②鉄棒でさかあがりができないで先生にはげまされたのを，叱責されたと思いこんでしまったことという2つの理由でした。給食や体育が不登校のきっかけになるということはよくおこります。しかし，これは単なるきっかけに過ぎないこともまた多いものです。同じ目に会ってもすべての子が登校拒否になるとは限らないわけですから。むしろ本当の原因はその子自身の性格の中にあることが多いのです。(もちろんその子の性格に形を与えたのは，家庭環境です。)

この子には3つ下の妹がいるんですね。この妹が小1になって，入学することになった。おじさんが入学祝にピカピカの机を買ってあげたんです。すると，これに比べて姉の机はあまりにも見すぼらしかった。そこでおじさんは悪いと思って，お姉ちゃんにも買ってあげようか？　と提案します。欲しい！　と言えばいいのにこの子は心にもなく「いらない」といってしまいました。でも，本当は欲しくてたまらなかったのです。同じような事件は，実は妹が生まれた時にもおこっているわけです。この子が3歳のときに妹が生まれました。この妹の方が上の妹よりも愛想もよくてかわいいんです。それで今まで姉にいっていた，おばあちゃんの愛情はすっかり妹に移っていきます。姉は見すてられてしまうんですね。

こんな風にして姉の方に「しっと」心が生まれ

ます。しかも，この子は「しっと」心を決して表明しない無口な子でした。(しっと心をどう表明すればいいのか分からなかったといった方がいいかもしれません。)

結局，この子は7ヶ月間，学校にいきませんでした。治療は，この子の母親を支え，安定させていくことと，この子自身の中にある①妹へのしっと心と②母親への甘えを表明させていくことに向けられました。母親が次第に安定し，子どもの気持ちを受けとめられるようになると，一気にこの2つがでてきました。妹と一緒に食事するのも拒否し，妹が少しでも母にベタベタするとものすごく怒るわけです。そして，それに続いて自分自身で母にベタベタすることが始まりました。これまで十分に甘えきれなかったことを取り戻すような激しい甘え方でした。

しかし，いずれにしても，この子は自分の思っていることを表現できるようになったわけです。これが大切なことなのです。我々の感情の中でもっとも解決しにくいものは「しっと心」である[7]わけですが，少なくとも，この感情は表明されなければなりません。表明されることによって，はじめて，そこに「しっと心」があるのだということが分かるからです。以前のこの子のように黙っていては分かりません。妹ばっかりかわいがられて，私はくやしいんだ！　とじだんだ踏んでくやしがることが大切なのです。この子は3歳までおばあさんの部屋で遊ぶことが多かったそうですが，そこでどんなアソビをしていたかというと，ただ色紙をもらって一人で折っている，そんなものだったようです。2人で，やりとりして(表現しあい，理解しあって）アソブというものではなかったのです。こんな風ですから，自分の気持ちを表現する能力が育たなかったのも無理はありませんでした。

この子は精密検査で異常なしと分かり退院しましたが，退院後先にものべましたように7ヶ月登校しませんでした。この間病院にも来てくれませんで，母親のみ1週間1回私のところにカウンセリングを受けにやってきていました。私はこの子にせっせと手紙をかきました。手紙のサインのあとにいつも猫のイラストをかいておきました。この猫のサインをみて，あっ，この人はこの手の話の通じる人だと思ったのでしょうか，やがて何回か私あてに「うさぎ」の絵本をかいて送ってくれるようになりました。図7をみてください。絵本の最後のところでさよならしているところです。そのうち病院にもきてくれるようになっていきます。

ところで，ここから移行対象の話になるのですが，この子の登校のきっかけは，「ダンボール箱」に入ってきた「死にかけ猫」でした。この子のうちは工場をやっているのですが，その工場で使うダンボールに，死にかけ猫が入ってきます。この猫を連れてこの子は学校にいくようになります。死にかけているのに，猫をぬいぐるみのようにあつかっているわけです。その様子をみて，友人の男の子が生まれたばかりの猫をくれます。この子は死にかけ猫に「ねこ」，友人にもらった猫に「ミー」と名前をつけて，交互に連れていきます。彼女は「ねこ」と「ミー」を公平にあつかいます。一方はオスなのですが，この子は2匹ともメスだといってきかないのです。つまり2匹の猫は自分(姉)と妹なんですね。2人とも公平に扱って欲しいといっているわけです。猫の扱い方をみていると，自分のして欲しいことを猫にしてあげていると，母親はだんだん分っていきます。猫はコミュニケーションの手段になっているわけですね。この猫は，授業中，みんなが作った小屋にいるのです。(担任の先生には，移行対象のことを説明して，猫をつれていくことを許してもらってありました。)この猫を通じて，この子は他の子とのコミュニケ

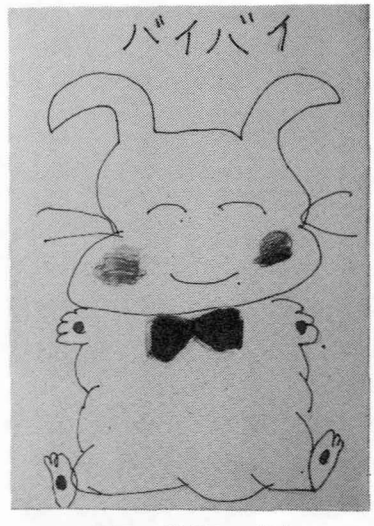


図7　症例2の絵本

図8　症例2の女の子と猫

ーションを深めていきます。猫を通じて友人の輪が広がっていったのです。図8をみて下さい。これは「ミー」の方です。「ねこ」の方はある寒い冬の日にいなくなってしまいました。それに対してこの子のいったセリフがいいんですね。「神さまがまた病気の子のところに送ったのかしら」というんです。

このように移行対象をもてるということはとても大切なことなのです。おくればせながらもそれが出現した，かつ私との手紙のやりとりの中にイメージの世界をみつけていった，ということができると思います。

ちなみにこの子には幼少時，移行対象はありませんでした。このケースから分かることは，移行対象は決して異常なものではない，それどころか，これがあることによって非言語的コミュニケーションが促進される，そんな大切な役割をになうものだということです。

ケース3：移行対象が具体的な「うさぎ」からイメージ（＝絵本）の「うさぎ」へと移行していった例[8]

このケースは，子どもがどのようにしてぬいぐるみの世界から，イメージの世界（絵本の世界）へうつっていくかをしめしてくれます。

これは4歳の女の子。主訴は体操教室に入ったら嫌がっておもらしをするようになった。登園拒否になるのではないかと心配であるというものです。

この子は一人遊びの好きな子です。ものすごく空想力の発達している人なんですね。1歳の誕生日に母親のぬってくれたピョンちゃんのぬいぐるみをもらいます。これは小さな枕にもなるものなんですね。寝る時いつも頭の下に敷くわけです。大きくなっても枕の上にのっけていました。このピョンちゃんは結局9代目まで続く事になります。ボロボロになって前のをすてる時には写真にとっておくんです。だからアルバムには8人のピョンちゃんがいます。名古屋に遊びに行ったときホテルに忘れてきたことがありました。これを機会に卒業しようと思って，そのままにしておいたのですが，あまりに不安そうなので黒ネコヤマトの宅急便で送り返してもらったということでした。

この子がプレイルームでやるアソビは「さよなら―こんにちわ」アソビが多かったのです。これは，まさに，分離への不安（体験）を人形アソビの中に表現していたといえるでしょう。「さよなら私はよその星にいきます」といい「こんにちは帰ってきました」といって帰ってくるのです。この子にとって母親のもとを離れていくというのは遠い星にいくようなものなのでしょうね。

ところで，幼稚園に入るようになって，この子はメロディちゃんという人形（うさぎ）を親戚の人からもらいます。図9がそれです。

面白いことに，このメロディちゃんは，ピョンちゃんとちがって，ひどい扱かいも受けるのです。悪い事をしたといって高いところから落とされることもありました。（このあたりはクラインの good object と bad object を連想させます[9]。）しかし，メロディが来たおかげで，ピョンちゃんは家の中だけで持っているようになりました。以前はどこへいくにも一緒でした。

この母子2人をみていますと，うさぎ（ビクビ

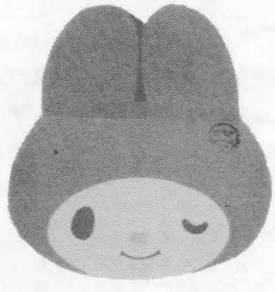


図9　メロデイちゃんのレターセット

クしていて，大人しくて，かわいいといううさぎ）の親子がひっそり，２人だけで周囲を気にしつつ暮している，そんなイメージが湧いてきました。母親もまた，小さい頃，集団に入れなくて悩んだということです。小１まで人前で話をすることができなかったということです。それで，この子もそうなってしまうのではないかと心配のあまり我々のところに相談にこられたわけです。

やがて，この子は治療を終了し，メロディの手紙（図９）を私に送ってくれるようになります。かつそれがピーター・ラビットの手紙セットにかいた手紙になっていきます。図10をみてください。これがピーター・ラビット[10]の手紙です。この手紙を読んでみます。

「いはらせんせいへ。わたしはまだ　ピョンちゃんをはなせません。いはらせんせいのネコとてもあしながですね。つやつやでとてもきれいでした。わたしは１の１くみです。いまピョンちゃんをだきしめました。ながいこと　でんきにあてといたのであったかくなりました。ちょっとかいて　ピョン子をだきしめてというように。いはらせんせいも　ちょっとみてネコだきしめてんじゃない？おねえちゃんはクマのにんぎょうを６ねんせいのくせにだきしめんの。よっぽどすきね。わたしもよっぽど（ピョンが）すきです。わたしこのごろあんまりなきません。せんせいのネコかわいかったな。またみたいな。では　さようなら。」

この中にでてくるネコというのは，私がサインにつかったネコを私が飼っているにちがいないと思い込んでいるんです。こんな風にとても思いこみの強い，のめりこむタイプの子なんですね。

このようにして，ピョンちゃんは寝るときだけのものになっていきます。そして，しだいに外の世界では離せるようになっていったのです。彼女は母親の身代りとしてのピョンちゃんの世界からメロディちゃんの世界へうつり，それがだんだんメロディバッグになり，メロディ・レター・セットで手紙をかいたり，ピーター・ラビットのレター・セットで私に手紙をかいたりというイメージの世界へ移行していったのだと思います。彼女は実際にもピーター・ラビットの絵本が大好きなんだそうです。この子とは今も手紙のやりとりをしています。

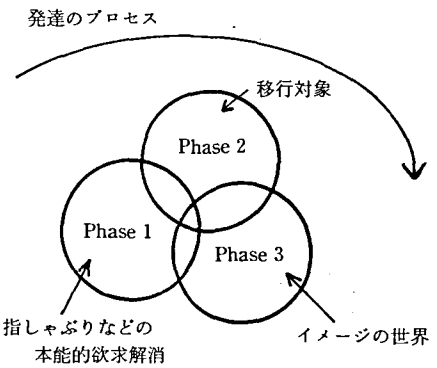
図10　ピーター・ラビットの手紙[10]

移行対象とうさぎについて考える

ケースからわかりますように，ぬいぐるみは，①とりあげてはいけない，②普通に考えるよりもいろいろな役割を持っている（したがって執着するものがあってもいっこうに構わない），③それとの遊び方，かかわり方の変化をみていくと子どもの心の成長が分かる，などのことがいえると思います。特にケース３から，子どもが，移行対象との間に演じているお話の世界（＝イメージの世界）の大切さが分かります。その中で自分なりのイメージの世界をつくっていくことで，母なるもの（マザー）から，自立していけるのだと思います[注2]。

注２

筆者は，子どもが生理的なものから社会的なものへと発達していくプロセスの中で，移行対象がどのような意味をもつかを位置づけるため，次の３段階を考えてみた。第１段階：指しゃぶりなどの本能的欲求解消，第２段階：毛布，ぬいぐるみなどの自分以外の“もの”への執着（これが移行対象にあたる），第３段階：内面化されたイメージ世界の確立がそれである。これを図式化すると次のようになる。



ところで，ここから絵本の世界の話にうつりますが，この「うさぎ」が移行対象になりやすいというのはどうしてなのでしょうか？　うさぎのもつイメージについて探ってみたいと思います。子どもたちに人気のある「うさこちゃん」[11]と先程のピーター・ラビット（図10）をみて下さい。図11と図10です。

そこにある特徴をいくつかひろってみます。それは，①怖くなくって，やさしい，②ふわふわしている，③あったかいといったイメージなんですね。これはまぎれもなく，我々が理想としての母なるものにもつイメージです。ところで，ピーター・ラビットはもう1つの特徴をもっています。それは④冒険が好きであること，⑤危い目にあうが最後にやさしい母さんのところに戻るということです。この2つの特徴は多少ですがうさこちゃんにも見られたものです。①～⑤をもう一度まとめると，「うさぎ」に対して我々がもつイメージというのは①やさしくって，②自分を守ってくれる（いつでも帰っていける）という2つのイメージ，そんなイメージをもっているということです。我々がこれ以上安心というものはない，そういうイメージを求めるとしたら[12]，まさにこれがそれです。絶対安心の境地ですね。

例えばうさこちゃんのシリーズをみますと，パパはふわふわさん，ママはふわおくさんといいます。ふわふわしていかにもリラックスした世界です。なんだかふわっとした気持ちになってしまいます。（誕生日のプレゼントにおじいちゃん，おばあちゃんからクマのぬいぐるみをもらったり，入院して看護婦さん人形をもらったり，物語の中に移行対象そのものが登場します）。しかし，こんなイメージのみでなく，ヒコーキにのったりしてけっこう冒険もするのです。これはピーター・ラビットのシリーズではいっそうはっきりします。ピーターはいたずらで，冒険好きのうさぎなのです。2つのうさぎ物語の中に描かれているのは，安心と冒険の世界です。（こうもいえるかもしれません。我々は安心の世界が確立してこそ冒険に旅立っていけると。）

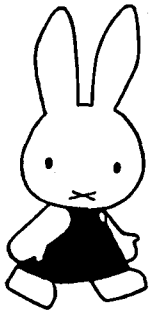


図11　ちいさな
うさこちゃん[11]

移行対象とクマのプーさんの世界

ところで，うさこちゃんの中にクマのぬいぐるみをもらう場面がでてきます。クマのぬいぐるみは欧米においてとてもポピュラーです。道端でも売ってるんだそうです[13]。これは，我々に，テディ・ベア，そしてテディ・ベアを原型にしてつくられたあのクマのプーさんのことを連想させます。これからクマのプーさんについてみていきますが，クマのプーさんこそ，まさに，ここでずっと取りあげてきた，移行対象のもっとも見事な例です。

クマのプーさんについてみていく場合，我々はプーさんの物語のみでなく，登場人物であるクリストファー・ロビンと作者でありロビンの父であったミルンのことも考えていく必要があります。図12をみて下さい。「クマのプーさん」[14]の最初のページにかいてある絵です。このページにこれはテディ・ベアであるとかいてあります。クマのプーさんの原型であるテディ・ベアというのはどんな熊なんでしょうか？　図13をみて下さい。これは私の娘が生まれたとき知人にもらった「テディ・ベア・ベビー・ブック」[15]です。この中に生まれてはじめて

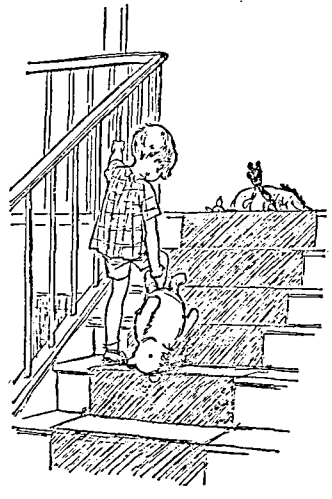


図12　階段をのぼっていくロビン：クマのプーさん[14]

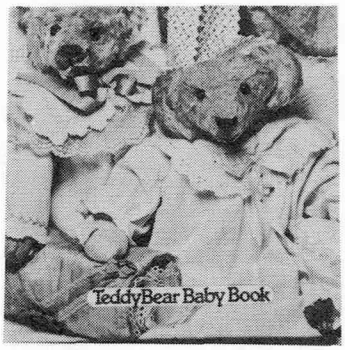


図13　テディ・ベア・ベビー・ブック[15)]

もらったテディ・ベアの写真をはる欄があります。青山で津川雅彦氏のやっているグランパパというオモチャ屋がありますが，ここでテディ・ベア・セールをやっているというのでさっそく行ってみました。いろんなテディ・ベアがありまして，とてもいい。一匹かったら一生ものという立派な熊です。売っている人も「この子は……」といって生き物のようにあつかっていました。ところがとても高い。一番安いので1万3千円，平均で2，3万するんですね。それで買うのを諦らめました。この熊はどうしてテディという名前になったかというと，エピソードがあるのです。アメリカ26代大統領のルーズベルト Theodore Roosevelt（1858～1919）の愛称 Teddy にちなんでつけられたとされています。彼が狩猟中あまりにもかわいいので子グマの命を助けた，それで Teddy の熊，テディ・ベアというようになったということです[16)]。

ところで，ミルンの児童詩集である「When we were very young：ぼくらが小さかった頃」[17)]にテディ・ベアがでてきます。図14をみて下さい。ベッドから落っこちたテディ・ベアと男の子のベッドに寝ているテディ・ベアがかいてあります。Teddy Bear という題がついています。この詩集がでたのは1924年で「クマのプーさん」のでる2年前なんですね。この頃はまだ，クマのプーさんにはなっていない，ただのテディ・ベア（ぬいぐるみ）なんです。ただのぬいぐるみであるテディ・ベアがどんな過程をへて「プー」になっていくか，移行対象としてのプーになっていくかに御注目下さい。同じ詩集の中に「Halfway Down：階段の途中で」という詩がでています。図15をみて下さい。上の方に熊がいるでしょう？　これはテディ・ベアでもあるけれど，もう半分うす目をあけていて，きっと将来は「プー」になっていくのではないかと，我々に期待をいだかせます。この男の子の中ではもう半分，移行対象になりかけているのではないでしょうか？

この詩集のあと第2詩集としてミルンは1927年に「Now we are six：そしてぼくらは6歳になった」[18)]という詩集をだします。ここではテディ・ベアは消え，プー（Pooh）が登場しています。図16をみて下さい。もうほとんどプーさんと呼んでいいクマを抱っこしています。図17をみてください。ここでは生きたクマとしてロビンの友人になっています。次に図18です。ぼくたち2人（Us Two）ともう大の仲良しの2人，生きた2人としてつき

Teddy Bear

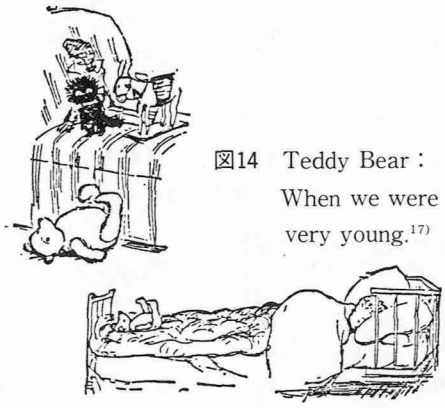


図14　Teddy Bear：When we were very young.[17)]

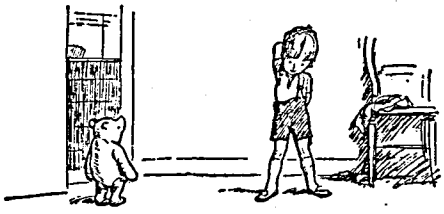
Halfway Down

図15　Halfway Down：When we were very young.[17)]

図16　The Charcoal-Burner：Now we are six.[18]

The Friend

図17　The Friend：Now we are six.[18]



Us Two

Wherever I am, there's always Pooh,

図18　Us Two：Now we are six.[18]

"That's what they are," said Pooh.

図19　Us Two：Now we are six.[18]

"That's how it is," says Pooh.

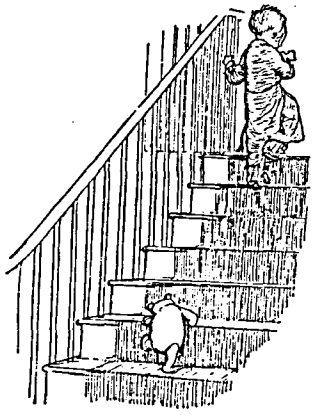


図20　Us Two：Now we are six.[18]

あっているのです。下にかいてある詩句をみてください。プーという名前がでてきます。ボクがいるところには，いつもプーがいる，とかいてあります。涙ぐましいくらいの親友になっているんですね。図19をみて下さい。先程の「ぼくたち２人」という詩です。こんな風に一緒に遊んでいるんです。

ここで注目して欲しいのは，次の図20です。これも「ぼくたち２人」の詩の中のさし絵なのですが，これを是非，図12の絵と比較して欲しいのです。図12の方はただのぬいぐるみのクマですが，ここでは，自分から階段をのぼって，ロビンのあとをついていく，生きたクマになっているのです。こんな経過をへて，テディ・ベアはクマのプーさんになっていく，その様子が，この２つの詩集を追っていくとよく分かります。

クリストファー・ロビンの実生活とプーさんの世界

ミルンの息子のクリストファー・ロビン，つまり実生活のロビンはどんな子どもだったのでしょうか？　ミルンは，自分の息子がテディ・ベアと遊んでいる様子をみて，「クマのプーさん」の物語を空想していきました[19]。したがって，この問題をぬきにすることはできません。

図21をみて下さい。テディ・ベアとクリストファー・ロビンが映っています[20]。後にいる女の人はロビンの母親だと誰れもが思うでしょう。しかし，これは母親ではないんですね。ナニーといいまして乳母と看護婦の役目をして，子どもを母親に代

図21　クリストファー・ロビンとナニー[20]

図22　クリストファー・ロビンと彼のテディ・ベア[20]

って育てる人なんですね。この頃のイギリスの上流階級の人は，自分で子どもを育てないんですね。成功した作家の息子たるロビンもそうでした。割とかわいそうな子なんです。彼は，このナニーにとてもなついていまして，夏，海水浴にでかけるときも，ナニーがいかないのならいきたくないといっています。彼自身のちに自伝の中で「私は，どこまでもナニーの子で，9歳までそうだった」とかいています。この人は，しかし，彼が9歳の時，結婚してミルン家を去ります。この年彼は寄宿舎に入るのです。ロビン自身，ナニーは母のように大事で何でもしてくれる人であった，そして（ここが大切なところなんですが），クマのぬいぐるみは，そのナニーの代わりだったといっています。決して母親の代りでなかったというところがロビンの2重に悲しいところだと思うのです。ロビンの母親からの自立はさぞかし大変だったろうと思います[注3]。図22をみてください。ロビンはこんな風にテディ・ベアと遊んでいました[20]。

ところで，クマのプーさんの物語世界の中で展開されるテーマはどんなものなのでしょうか？　この世界ではみんなとても親切です。とっても根暗のイーヨーなども，ちゃんとプレゼントをもらえる。誰も切りすてられない，そんな世界なんですね。プーさんの中で私が最も好きなのは，はねっかえりのトラーです。いつもハネっかえっている，いたずらトラです。ところがこのトラーは最初から元気だったわけではない。このトラーにはお母さんがいないんです。（これはまるで，現実のロビン自身に似ていますね。）このトラーが何を食べるのか？　プーたちはいっしょうけんめい探してあげます。図23，図24をみて下さい。これはトラーが何を食べるのか，試しているところです。ハチミツもドングリも，アザミもだめだということが分かります。図25をみて下さい。結局，トラーが食べられるのは，カンガのとこの子ども（赤ん坊）のルーが食べる麦芽エキスだったのです。トラーは，大きそうに見えたけれど，実はまだ赤ちゃんだったというところが，とても面白いところだと思います。我々臨床家は，心の傷ついた子どもをいやすために，その子を一端，赤ちゃん返りさせます。そうすることによって，その子はまた力を得ることができるのです。さて，このようにして

注3

実際ロビンの自立は大変であった。あらかじめ母と離され，つづいてナニーと別れるという形で分離を経験したロビンにとって，最も母性をそそいでくれたのは，彼の父（つまり，ミルン）であるという。ミルンは決してロビンを叱らなかった。しかし，同時にミルンは偉大な作家であり，のりこええぬものとしてロビンの前にそびえ立っていた。ロビンは結局，本屋になるが，その本屋には父，ミルンの本は置いてないという。「どうしてあなたは作家にならなかったのか？」というインタビューに答えて，ロビンはいう。「この世には素晴しい本が既にいっぱいある。今さらわたしが付け加える必要などない」と。こんな形でロビンは父をのりこえたのだと思う。のりこえるべき当面の敵である父が，母性をもかねそなえているとしたら，その闘いは，おそらくドロドロのものになるにちがいない，と筆者には思われる。このあたりのことについては稿を改めて，「プーについての2つの自伝」というタイトルで論じる予定である。

図23　ハチミツをたべられないトラー[21]

図24　アザミをたべられないトラー[21]

図25　麦芽エキスをたべるトラー[21]

図26　ルーとピクニックにでかけるトラー[21]

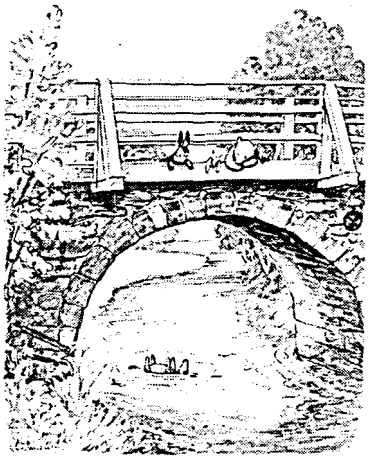


図27　川を流れてきたイーヨー[21]

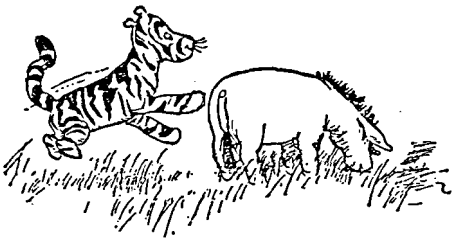


図28　イーヨーをつきとばしたトラー[21]

トラーはカンガのとこの養子になります。図26をみて下さい。実子のルーといっしょに手弁当を持ってピクニックに出かけるトラーのなんと幸せそうなこと。

図27をみて下さい。ある日，プーたちが橋のところで遊んでいると，イーヨーが川を流れてきます。実はこれはトラーが，川辺で草をたべているイーヨーをつきとばしたからなんです。図28にその様子がかかれています。こんなにもトラーは元気になったんですね。まさに，どうしようもない，けれど憎めないはねっかえりものです。

このトラーと同じように，現実のクリストファー・ロビンもプーの世界の中で成長し，自立していったのだと思います。

移行対象との決別：さよならプー

やがてロビンは9歳になり，プーとお別れします。図29をみて下さい。2人が別れ，そして百年たっても，いつでも会えるという固い約束をしたギャレオン凹地です。ここのところは感動的に次のようにかかれています[21]。

「そこで2人はでかけました。ふたりのいったさきがどこであろうと，またその途中にどんなことがおころうと，あの森の魔法の場所には，ひとりの少年とその子のクマがいっしょにあそんでいることでしょう。……プーぼくのこと忘れないって約束しておくれ，ぼくが百歳になっても！」

図30をみて下さい。決して切れることのないプーとロビン，なんと幸せなことでしょう！

それではこのギャレオン凹地というのはいったいどこなのでしょうか？

それはその後のプーの運命によって明らかです。プーはアメリカ旅行にでかけます。クマのプーさんの物語があまりにも有名になり，このぬいぐる

図29　ギャレオン凹地[21)]

図30　ロビンとプー[21)]

みを一目みたいというアメリカの少年・少女の熱望に応えたのです。このさい，ミルンが出した条件はぬいぐるみのプーがいくら汚れても決して洗わないというものでした。プーは今でもアメリカのダットン社の陳列棚の中にいるんだそうです。プーのぬいぐるみに会いたくないかというインタビューにこたえて，今や大人になったロビンは，こういったそうです。

「平気です。愛情はいつも自分の心の中にあります」と。我々は，ある対象との愛情をイメージとして内面化できてはじめて，ぬいぐるみの世界から旅立っていけるのだと思うのです。この内面化された場所がまさにギャレオン凹地なのです[注4]。

このようにみてきますと，クマのプーさんは，ロビンという少年が，実際のテディ・ベアを使って，プーという物語（＝イメージ世界）の中で，プーとの2人の世界を作りあげてそこからぬけだしていく。まさにこれはぬいぐるみとその運命を，子どもの内面からとらえた物語なのです。

もう一つの旅立ち：センダックの世界

ここでもうひとつ，センダックの「かいじゅうたちのいるところ」[22)]の話をしたいと思います。第1頁（図31）を見ますと，マックスという男の子が，狼のぬいぐるみを着て登場します。自分がぬいぐるみになっているんですね。本当のぬいぐるみは，部屋の隅で首吊りになっています。このあたりも，いかにも，いたずらっ子のマックスの性格を表わしています。まるで，ボクはもうぬいぐるみなんて卒業さといっているみたいです。あんまり，いたずらがすぎるので，お母さんに食事させません，と部屋にとじこめられてしまいます。

この部屋に木が生えて森になり（図32），そこから外へ出て，海を渡って，怪じゅうたちのいるところへ行きます。やがて怪じゅうたちを召使いにして，自分は王様になって暮らしている（図33）。そうしているうちに，家に帰りたくなって，行かないでくれという怪じゅうたちと別れて自分の家に帰ってきます。この期間が，約2年くらいの旅行だったと書いてあります。

ところが，自分の家に帰りつくと，テーブルの上にスープが置いてあり，そのスープはまだあた

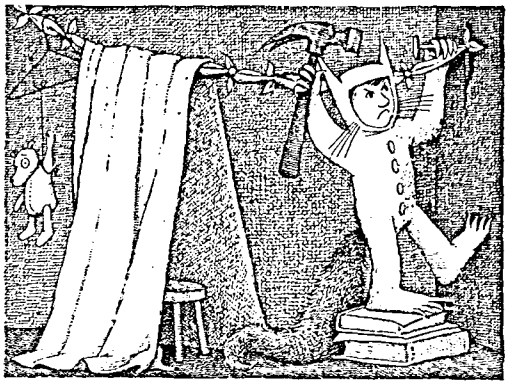


図31　マックスとぬいぐるみ：かいじゅうたちのいるところ[22)]

注4

これはウィニコットのいうリンボ界に相当するのではないかと思われる。

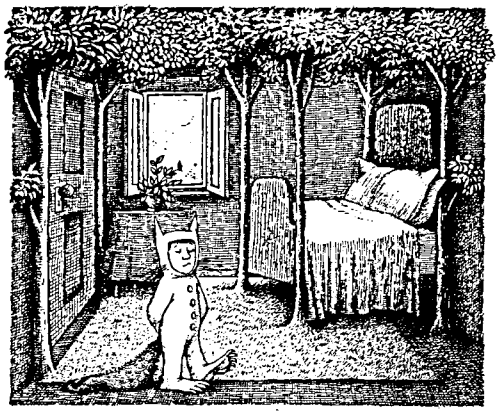


図32　部屋の中が森になる：かいじゅうたちのいるところ[22)]

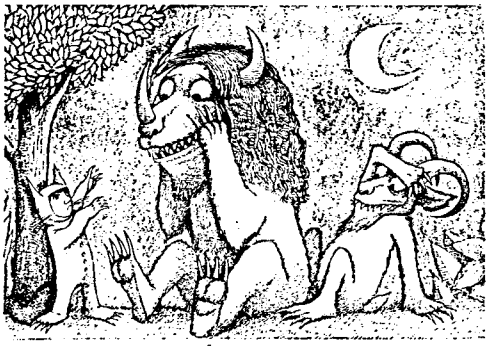


図33　かいじゅうを支配するマックス：かいじゅうたちのいるところ[22)]

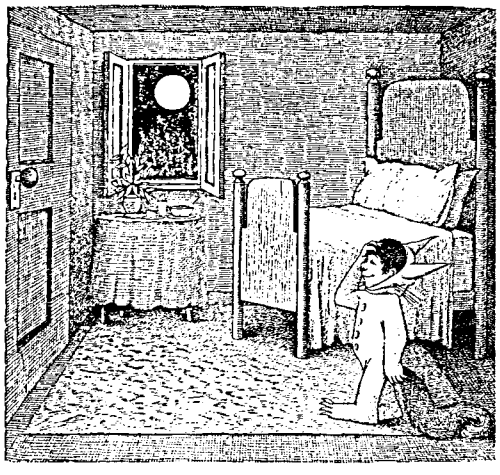


図34　スープはまだあったかかった：かいじゅうたちのいるところ[22)]

たかったと書いてあります(図34)。ここが，この物語のミソなのですが，マックスが部屋に閉じ込められてから，許されて外へでるまでの時間は，まだスープのさめないような短い時間だったわけです。けれど，マックスにとってのイメージの世界は一年にも二年にも思われたんですね。

マックスはイメージの世界を自分で創り出すことによって，ぬいぐるみの世界から卒業していくわけです。そこには，厳しくて，かつ，やさしいお母さんの存在がある。いつもあたたかいスープを用意してくれるお母さんがいるわけですね。(この点でマックスの母子関係はとてもよいと思います。先にのべた，二重の悲しみを背負ったクリストファー・ロビンとは大変な違いです。)

おわりに：イメージの力

大人から見ると，ただ，ぬいぐるみを抱いている子どもにしか見えなくても，子どもの内面にはさまざまなイメージの世界が展開されているわけですね。そういう子どもたちの内面の世界をよく教えてくれるのが，「クマのプーさん」であり，「かいじゅうたちのいるところ」であると思い紹介しました。

さきほどのケース紹介（ケース２）で，私は，しっと心というものは人間がもっとも解決しずらい感情だといいましたが，しかし，それを喋ること，くやしいんだと地だんだ踏んで表現することによって解決することがあります。ここにも言葉のもつイメージの力が隠されているのではないかと思います。そこから，絵本の話がはじまるのだろうと思うのですが，それは絵本の専門家の人におまかせしまして，心理学者からみた，「ぬいぐるみから絵本のイメージの世界」についてのお話は，この辺で終らせていただきたいと思います。

《引用文献》

1）ウィニコット，D. W.（橋本雅雄訳）：遊ぶことと現実　岩崎学術出版　1979.

2）シュルツ，M. S.（谷川俊太郎訳）：やったぜライナス（スヌーピー・ブックス　17）　角川書店　1982.

3）井原成男：気になる子どもたち（田島信元・西野泰広・矢沢圭介編：子どもの発達心理学）福村出版　1985.

4）ハミルトン，W. & マクドナルド，H.（越智道雄訳）：コアラの本　サイマル出版会　1984.

5）井原成男：毛布やガーゼに執着した５歳女児（困

ったときの相談). 親と子, Vol. 32, No. 1：12—15, 1985, 民生文化協会.
6）井原成男：登校拒否（前川喜平編：ケース・スタディ小児神経疾患の臨床） 中外医学社 1985.
7）佐藤紀子：Personal Communication, 1983.
8）井原成男：移行対象の発達的意味—移行対象がさまざまな現れ方をした3症例からの検討—. 第53回小児精神神経学研究会抄録, 小児の精神と神経, Vol. 25, No. 1, 1985.
9）スィーガル, H.（岩崎徹也訳）：メラニー・クライン入門 岩崎学術出版 1977.
10）ポター, B.（石井桃子訳）：ピーター・ラビットのおはなし 福音館書店 1971.
11）ブルーナ, D.(いしい ももこ訳)：ちいさなうさこちゃん 福音館書店 1964.
12）佐藤紀子：Personal Communication, 1984.
13）渡辺由美：Personal Communication, 1984.
14）ミルン, A. A.(石井桃子訳)：クマのプーさん 岩波書店 1962 （原作はWinnie the Pooh. 1926).
15）Bialosky, P. & Bialosky, A.：Teddy Bear Baby Book. Workman Publishing, New York, 1982.
16）Menten, T.（小島紀代美訳）：テディ・ベア・カタログ 雄鶏社 1985.
17）Milne, A. A.：When we were very young. Methuen & Co Ltd, 1924.
18）Milne, A. A.：Now we are six. Methuen & Co Ltd, 1927.
19）ミルン, A. A.（原昌・梅沢時子訳）：ぼくたちは幸福だった（ミルン自伝） 研究社 1975.
20）ミルン, C.（石井桃子訳）：クマのプーさんと魔法の森 岩波書店 1977.
21）ミルン, A. A.(石井桃子訳)：プー横丁にたった家 岩波書店 1962 （原作はThe House at Pooh Corner, 1928).
22）センダック, M.（じんぐう てるお訳）：かいじゅうたちのいるところ 冨山房 1975.